

「水色のハンケチ」

(2008)

中学を卒業すると、彼女は地元の高校へ、僕は父の転勤で違う町の高校へ入学した。在学中一人きりで話しかけること等無かつたと思うが、生徒会ではお互い役員をし、英語劇では僕が浦島太郎、彼女が海の乙姫役だったり、木下順二の劇では「ツウ」と「運す」役を演じたりしていた。

住む町が違い、通う高校も違う「う」ということが大きなきっかけにもなり、15才の男と女の7年間の文通が始った。折しも青春真只中、音楽・映画・詩歌・小説に感動し、絵・彫刻・建築・デザインに熱を入れ始めた頃だ、そんな燃えるような日々の情熱を彼女への手紙にしたためるのが日課になつた。一方でお互い年頃の男と女・・・頭搔き筆るような思いもあつた。今なら「メールアド交換・車でデート・マイルームで合体」・・・と順調な結末なんだろうけど、当時はお互い下宿・寮生活で、電話さえままならぬ時代、「手紙と電報と汽車」でのデートだった。デートといつてもまず金が無い、初めてのプレゼントに「ハンカチ」を買い彼女のインシャルを入れてもらおうのが、僕がその時出来る精一杯の事だった、喫茶店に入りジュースを飲み、河原の土手で肩を寄せ、勇気を出して生まられて初めてのボートに乗つた。

あれから25年経つたある日、僕の絵の個展の会場にふと彼女が現れた。

「絵が一枚欲しい・・・」と。すでにお互い幸せな家庭を持ち、初めて二人は落ち着いた「大人の会話」が出来た。・・(中略)

あれから50年経った今、彼女からの手紙の束が未だに捨てられずに僕の手元にある。男というのは真実未練がましいものだ。今彼女に15歳になる孫娘がいても全く不思議ではない、そのお嬢さんにおばあちゃんが50年前に書いた手紙をお返ししたいな、と思っている、今までとてもいい、今から25年後、彼女が「大人」になつてからでもいいか?・・それまで又ゆっくり待つとしよう。

葡萄噛み 少女のはなし命のこと

若葉手折り 君はしばらく女めく



秋の虹 声美しき人を見し

春夕日 一言多きこと悔やむ

人待ちの春のホテルや徒あだこころ

ゴツ木見て 女差し出す春日傘
霞する 二人生きてし時止まれ

あられ

花雲り乳房に触るる夢現

縁薄き女なりしか 年の暮れ

酸漿を摘む女や人を恋ふ



マフラーをくれし女と年の暮れ
振袖で逢いし女の小さき嘘
春風に女守りしもの輕ろし
女盛り 檸檬苦も無く齧るひと
浴衣着て少し猥らな女振り